

《参考資料》

完成台本

学部教育教材

博物館学芸員の仕事 —考古学編—

「資料の整理と保管」

VTR/20分28秒

□研究組織

—センター教官—

福井 康雄（教授・主査）

高橋 秀明（助教授）

芝崎 順司（助手）

宮本 友弘（助手）

—客員教官—

木下正史（東京学芸大学教授）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）

永島正春（国立歴史民俗博物館教授）

—研究協力者—

安藤孝一（東京国立博物館学芸考古課長）

須藤 護（竜谷大学教授）

早川智明（埼玉県立博物館館長）

—埼玉県立博物館—

林宏 一（学芸部長）

今泉泰之（企画展示課長）

石岡憲雄（資料調査課長）

宮滝交二（学芸員）

加藤かな子（学芸員）

利根川彰彦（学芸員）

二階堂実（学芸員）

杉山正司（学芸員）

加藤光男（学芸員）

栗原和彦（学芸員）

若松良一（学芸員）

西口良子（学芸員）

□ 基本資料

題 名	学部教育教材博物館学芸員の仕事—考古学編— 「資料の整理と保管」
制 作	メディア教育開発センター（大学共同利用機関）
制 作 協 力	NHK エデュケーショナル
上 映 時 間	20分28秒
原 版	D-3・2分の1テープ
撮 影	（第一回）平成7年11月24日（金）～26日（日） 埼玉県立博物館 （第二回）平成8年1月17日（水） 研究スタジオ
本 編 集	平成8年2月19日（月）～21日（水）※制作棟 RA スタジオ
録 音	平成8年3月5日（火） ※制作棟・RA スタジオ
完 成 試 写	平成8年3月25日（月）

□ 画面の時間経過

(1) 開始タイトル制作・協力 (12秒)	12秒
(2) プロローグ —博物館資料の役割— (1分13秒)	1分25秒
(3) 考古資料の収集 (1分30秒)	2分55秒
(4) 考古資料の整理 (13分42秒)	16分37秒
(5) 考古資料の保管 (1分59秒)	18分36秒
(6) エピローグ —保存資料の活用— (1分11秒)	19分47秒
(7) 終了タイトル (41秒)	20分28秒

音楽	効果	画面	時間	解説	
M1a		1	開始タイトル	(12秒)	
			○制作・協力	(12秒)	
		2	プロローグ —博物館資料の役割—	(1分13秒)	
M1b		<p>○埼玉県立博物館 —外景 T①W 「埼玉県立博物館」 カメラが、屋外の復元堅穴住居などを写しながら、ゆっくりと入口のほうへと近づいていって—</p> <p>○同一内部 ・エントランスホール ・常設展示室 T②W 「常設展示室」 来館した観客とともに第一展示室、第二展示室の古学資料を見ていく。 中心となる展示資料の上に重ねて—</p> <p>○メインタイトル 「博物館学芸員の仕事 (考古学系博物館) 収集資料の保管」 (FO)</p>	(1分25秒)	<p>N「博物館で、さまざまな調査研究や、展示などの社会教育活動を進めていく上で、資料を収集し、それを整理・保管する作業は、博物館学芸員にとって、展示とともに、欠かすことのできない、基本的な仕事になっている。</p> <p>埼玉県立博物館の考古資料の常設展示室—ここには、県の内外から収集された、数多くの資料が展示されている。</p> <p>では、これらの資料は、どのようにして収集され、整理・保管されていくのだろうか？この博物館の考古資料の場合を例に見ていくことにしよう」</p>	
3	考古資料の収集	(1分30秒)			
		(FI) ○埼玉県立博物館			

	<p>—内部 ・収蔵庫入口 その扉が、ゆっくりと開きカメラが中へと入っていく。</p> <p>T③W 「収蔵庫」</p> <p>・収蔵庫内部 棚に整理された、夥しい数と種類と石器、土器、埴輪などの考古学資料</p> <p>○イラスト 博物館における考古資料の収集 (館所有資料)</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>発掘・採集</p> <p>製作(複製)</p> <p>購入</p> <p>受贈</p> </div> <p>受託</p> <p>借用</p> <p>(WIPE) (2分55秒)</p>		<p>N「収集した、さまざまな資料の収められた博物館の収蔵庫。ここには、各時代の多種多様な資料が、一定の分類法則に従って、整理して納められている。</p> <p>整理棚に収められた、おびただしい数の考古資料。これらの資料は、どこからどのようにして収集されたものなのだろうか？考古資料の収集方法には、さまざまなケースがあるが、大きくは二つに分けられる。</p> <p>一つは、発掘や製作、購入や受贈などで得た博物館所有の資料である。</p> <p>そして、もう一つは、寄託や借用によって博物館外から預かっている資料である。</p> <p>このように、博物館の考古資料は、さまざまな方法で収集されるが、それらを博物館の正式な資料とするためには、一定の手続きが必要となる。では、次に、この博物館では、収集された資料が、どのような手順を経て、正式に、博物館資料となるのかを見ていくことにしよう」</p>
	<p>4 考古資料の整理 (13分42秒)</p>		
<p>車音</p>	<p>○埼玉県立博物館・内部 ・廊下 ある資料(土器)が、台車に載せて運ばれていく。</p> <p>T④W</p>		<p>N「新しく博物館に受け入れられた考古資料が、担当の学芸員によって運ばれてくる。搬入先は、資料の整理作業を行う工作室である。</p>

		<p>「学芸員 利根川章彦 (考古担当)」</p> <p>マウント</p> <p>・工作室 担当の学芸員が、搬入した、さまざまな処理作業を始める。</p> <p>—水洗い— 全景 T⑤W 「水洗い」 断面の水洗い</p> <p>(WIPE)</p> <p>—接合— 全景 T⑥W 「接合」 部位の確認</p> <p>仮止め</p> <p>接合</p> <p>(WIPE)</p> <p>—補修作業— 石膏などによる欠落部分の補填など—</p> <p>紙型を張る。</p>	<p>(3分 29秒)</p> <p>(4分 23秒)</p> <p>(5分 47秒)</p>	<p>受け入れられた資料には、まず、クリーニングの処理が施される。</p> <p>クリーニングの方法は、その資料の種類によって異なるが、このように、出土した土器の場合には、水洗いが行われる。</p> <p>資料にもともとついていた炭化物や顔料などの痕跡を落とさないように、作業は、十分に気を配って、慎重に進められる。</p> <p>また、断面については、後で行う接合の妨げにならないように、特に念入りに、泥を落としておくことが必要となる。</p> <p>クリーニングが終わった後、ばらばらの状態で出土した土器などの場合は、その破片を集め、接合の作業を行うことになる。</p> <p>接合に当たっては、接着剤を使う前に、まず、どの破片と破片とが、また、どの部位と部位とが合うかを、丹念に確かめる。</p> <p>そして、接合面が一致した場合、アルミ製洗濯挟みで仮止めしていく。</p> <p>こうした試行錯誤を繰り返しながら、資料の全体像が確かめられたとき、初めて、接着剤による接合の作業に入ることになる。</p> <p>長い時間をかけて、接合の作業を行った結果、ばらばらに出土した破片は、もとの土器の形を取り戻した。</p> <p>土器などを接合した場合、欠けた部分が出ることも少なくない。そのような場合、石膏や樹脂などで補修することになる。</p> <p>補修に当たっては、まず、欠けた部分の形</p>
	水音			
	作業音			

作業音	石膏を流す。 T⑦W 「石膏による補修」		を合わせて紙型などをあて、テープで止める。
			そして、その紙型に、水で溶いた石膏を流し込んでいく。
			石膏が乾いた時、紙型をはずし、さらにこの後、ナイフなどで形を整えて、補修は完成することになる。
	(WIPE) (7分 —写真撮影— 19秒)		接合や補修が終わり、資料の形が整ったところで記録の作業に入る。写真撮影は、考古資料の記録には欠かすことの出来ない方法の一つである。
	(WIPE) (7秒 —拓本— 43秒)		また、資料によっては、表面の文様や文字などを写し取るために拓本がとられることもある。
	T⑧W 「拓本」 画仙紙による作業		拓本を取るには、まず、資料に画仙紙を貼り、その表面を水で湿めらす。
	T⑨W 「画仙紙」		そして、ある程度乾いた段階で、まんべなく墨を叩いていく。
	墨を付ける		墨が乾いた時、拓本の完成である。
	完成した拓本 (WIPE)		考古資料の記録の場合、このような拓本や写真とともに実測図も作られる。
	—計測— 全景 資料の観察 T⑩W 「実測」	(8分 50秒)	実測図の作成は、まず、資料をさまざまな角度からよく見て、資料の形が、最もよく分かる箇所を探すことから始まる。
垂線を引く		そして、測定する位置が決まったところで、最初に垂線を引く。	
測点を打つ T⑪W 「測点」		つぎに、その垂線に沿って測点を打ち、計測を始めることになる。	
プロフィールによる		測点に定規を当て、その位置を方眼紙の上にマークしていく作業— プロフィールなどとも呼ばれる実測器を	

	<p>作業 (OL)</p> <p>刷毛目のチェック (OL)</p> <p>完成した実測図</p> <p>監査・分類</p> <p>・研究室 担当の学芸員が、他の仲間と収集資料の類例を検討し、学問上の名称を与える判定の作業を行っている。</p> <p>T⑱W 「資料の判定」</p>	<p>使って型取りをし、マークした点を結び資料の輪郭を描いていく作業—</p> <p>製作時の調整の際に、資料の表面についた刷毛目などをチョークでなぞっていく。そして、この刷毛目も、貴重なデータとして、方眼紙の上に記していく。</p> <p>こうして、資料の形、表面の特徴、さらには、焼き具合、土器に用いた土の状態などのデータを書き込んで、実測図は完成することになる。</p> <p>一連の作業を終えた後、今度は、資料の時代や学問的な位置付けを明確にするための調査に入る」</p> <p>利根川「…資料的な性格だとか、時代の…ですとかね、その辺のところを、今日石岡課長と若松さんにお聞きしたいと…て集まって戴いたんですけど…」</p> <p>若松「この壺は、受け口ですよ。これは北陸の月影辺りの影響のものとして展覧しても差し支えないんですかね？」</p> <p>利根川「私は、北陸よりはね、近江、滋賀県地方のですね、専ら、受け口状口縁と付いているタイプの土器の一番新しいやつですね」</p> <p>若松「そうかなあ。滋賀のほうだと、受け口とセットで、ここへ線刻のアールの模様が入ってくるんだけど、やっぱり、それが入らないということは、変容しちゃったものと考えれば、どちらとも判断が難しいと思うんだけど」</p> <p>利根川「ただ、北陸のものだと、立ち上がりが高くなるでしょう」</p> <p>若松「口縁部の形が、もっと違うか…」</p> <p>利根川「で、比較的、反り上がるような傾向があるから、三郷なんかで出ているタイプがありますけど、ああいうやつに比べるともう少しプリミティブというかね、違う系統のものをもってきているという感じがしちゃうんですけどね」</p>
--	--	---

T③W

「検討の結果—滋賀県地方から中部地方にかけての弥生土器の影響を受けて地元で作られた土器と判定された。」

鑑定結果を、まとめていく担当学芸員—

(WIPE) (14分
9秒)

○イラスト
埼玉県立博物館の考古資料の分類
(考古資料)

- 土器
- 石器
- 木器
- 金属器

(WIPE) (14分
34秒)

ラベリング

T④W

「資料の登録」

- 資料カードの作成
- 指定のカードへの書き込み

写真の張り付け

- ラベルの作成—
- カードを作成し、資料に張り付ける。

若松「まあ、受け口が、こう本格的に蓋がはめられるようなタイプは、確かに、近江的かもしれないけど…」

利根川「逆に、今度は、月影系統で考えていくと、こういう作りで考えていくと、古くしいなくちゃならないでしょう。で、足が付くタイプだから、やっぱり基本的には、月影にしても、それから近江系の土器にしても、平底のものですから、もっと尾張の影響を受けてね…」

若松「台がありませんからね」

利根川「そういう土器になっちゃったということは、新しい…」

若松「もとは近江であるけれど、近江からもってきた土器という風には…」

N「受け入れた資料は、こうした調査を経て、博物館の分類システムに沿った、分類上の位置づけを得ることになる。

一般に、博物館では、考古資料を、土器・石器・木器・金属器の四種類に分けて分類しているが、新しく受け入れた土器は、この度の調査で、古墳時代前期の土師器で、近江から中部地方にかけての弥生式土器の影響を受けて地元で作られたものと位置づけられることになった。

調査を終えた資料については、資料カードが作られる。

分類番号、資料の名称、時代、所在地、そして、土器の特徴がサイズなどを書き込んだこのカードが、今後、この資料の基本データとなる。

必要事項を記入した後、最後に、写真を貼って資料カードは完成である。

資料カードができたところで、資料の分類番号、名称、採集地を記したラベルを作る。

機械 音	カードを付けた資料 (WIPE) 電子ファイル化 ・事務室 担当学芸員が、データをインプットしていく。 完成した資料ファイル (OL)	(16分 15秒) (16分 37秒)	そして、それを資料に張り付ける。 こうして、ラベルを付け分類された資料は、いつでも資料カードと照合できることになる。 すべての受け入れ作業を終わった収集資料のデータは、コンピュータへとインプットされる。また、同時に、資料カードも電子ファイル化される。 こうした整理作業を経て、初めて、受け入れ資料は、博物館資料として、その機能を発揮することになるのである」
	4 考古資料の保管 (1分59秒)		
	○埼玉県立博物館一内部 ・収蔵庫 収集資料が運び込まれ、分類に沿った所定の収蔵棚へと収められていく。 出土品の収納箱 棚に整理された土器等 (ボケ WIPE) 特別室 (OL) ○イラスト 収蔵庫を中心とした、埼玉県の施設配	(18分 12秒)	N「すべての整理作業を終えた資料が、収蔵庫へと運び込収集資料が運び込まれてくる。 こうして、博物館の所有となった資料は、整理棚へと収納され、展示や研究などに利用される機会を待つことになる。 その所在が、すぐに分かるように、整理番号をふって、順番に並べられた遺跡からの出土品を取めた箱— 年代や種類別に分類し、いつでも取り出せるように配置された展示用の埴輪や土器— また、収蔵庫の片隅には、壁や床を板張りにし、温度や湿度を出来るだけ自然に近い状態に保つように工夫した部屋が設けられ、その保管に特別の配慮が必要な資料が収められている。 …このように、博物館資料の保管にあたっ

M3 ↓ M4	機械音	置図 (WIPE)	(18分 36秒)	ては、単に、資料を整理するだけでなく、空調をはじめとする収蔵庫の保存環境を整備し、資料の劣化を防ぐとともに、それぞれの資料を、その目的に沿って、いかに利用のしやすい状態に保っておくかという工夫も大切な要素の一つとなる」
		5 エピローグ —保存資料の活用—	(1分11秒)	
		<p>○モニタージュ コンピュータから、資料のデータを取りだす学芸員</p> <p>・そのデータを囲んでの学芸員たちの打合わせ</p> <p>・出てきたデータへズームアップ (ボケ WIPE)</p> <p>・データをもとに、収蔵庫から資料を取りだす学芸員</p> <p>・研究室に運ばれていく資料</p>	(19分 47秒)	<p>N「学芸員たちが、必要な資料のデータを求めて、コンピュータで検索を進めている。</p> <p>このように、求めている資料を、瞬間に取り出すことが出来るのも、収集した資料の整理と保管のシステムが整備されているからである。</p> <p>登録されたデータに基づいて、収蔵庫から、担当の学芸員によって取り出されていく資料—</p> <p>資料の整理と保管は、多彩な博物館の活動を支える基本的な要素となっているのである」</p>
6 終了タイトル	(41秒)			
		<p>○前の画面がストップしたところへ重ねて—</p> <p>T⑩W 「学部教育教材作成研究会」</p> <p>安藤孝一（東京国立</p>		

博物館)
亀井明德(専修大学)
木下正史(東京学芸
大学)
白石太一郎(国立歴
史民俗博物館)
永嶋正春(国立歴史
民俗博物館)
早川智明(埼玉県立
博物館)

埼玉県立博物館

林 宏一(学芸部
長)
今泉泰之(企画展
示課長)
石岡憲雄(資料調
査課長)
宮瀧交二(学芸員)
加藤かな子(学芸
員)
利根川彰彦(学芸
員)

二階堂実(学芸員)
杉山正司(学芸員)
加藤光男(学芸員)
栗原和彦(学芸員)
若松良一(学芸員)
西口良子(学芸員)

放送教育開発セン
ター

川島淳一
福井康雄
須藤 護
芝崎順司
宮本友弘

制作協力 NHK エデ
ュケーショナル

制作スタッフ

脚本・演出 福井康雄
撮影 西川浩史
照明 金子昭三

↓		技術 織田寿一郎 制作進行 落合智子 黒柳周一 学部教育教材 博物館学芸員の仕事 —考古学編— 資料の整理と保管 終 (画面溶暗)	(20分 28秒)
---	--	---	--------------